

40回目の教員合同研究会を記念して

総合研究所長 中村 義 寿

総合研究所主催の教員合同研究会が、本年3月の開催をもって40回目を迎えた。第一回の合同研究会は1979年(昭和54年)のことであり、その後30年を経て40回目となった。30年で40回というのは、初期の頃の合同研究会は年2回(主に9月と3月)開催されていたことによる。しかも当時は、瀬戸の「労働者研修センター」や私学共済宿泊施設である「愛知会館」(現在の愛知会館・名古屋ガーデンパレスの前身で、JR千種駅に隣接して建てられていた)などに泊りして開催されていた。当時本学は経済学部だけの単科大学であったため、教員間で連絡がとりやすかったことや、この単学部の中にいろいろな分野の教員が集まっていたため、同僚としてどのような研究をしているのだろうとお互い非常に興味を引かれたことなどが、年2回の開催を可能にしたと思われる。1日4名程度の発表者で2日間の研究会が熱心な討論を交え、しかも泊り掛けということもあって和気藹々とした雰囲気の中で開かれていた。

その後、外国語学部が設置されて2学部となった頃から年1回の開催となり、また商学部が設置された頃からそれも学年末1日だけの開催となった。そして、2006年に人間健康学部が出来た年に、同学部に所属する教員が中心となってこの研究会を組織したことを契機に、以後学部主導の方式が恒例化し、今日に至っている。このように見てくると、新学部開設とともに研究会の形式が少しずつ変わってきているのが分かる。もっとも、規模的にはだんだんと縮小傾向にあるように見えるのは少し気になるころではあるが…。大学が大きくなるにつれて、また時代とともに各教員の大学内外での業務が増えてきたことや、学部間のコミュニケーションをとるのが難しくなっていることが、開催回数を減らしている大きな要因となっているのであろう。各人の研究領域がますます細分化してきていることも関係しているのかもしれない。しかし、4学部体制の現在では、単学部時代からみれば明らかに教員数は増えており、また近い将来は学部の増設も予定されているわけであるから、教員を刺激し、その研究活動を促進するというこの研究会の趣旨からして、学部間、教員間の垣根を取り払うとともに、教員の相互協力の下で今後再び年複数回開かれることを期待したい。中身についてもより実のあるものにするために、総合研究所のメンバーを中心に引き続き議論を重ねて行きたい。

ともあれ、このようなわけで近年では4学部の輪番制で年1回3月初旬に開催されるのが通例となってきている。そして本年度は、経済学部が当番となって「現代経済学と21世紀の日本経済」というテーマでの開催となったが、昨年秋からの深刻な金融・経済危機と重なり、テーマおよび報告内容が結果として時宜を得たものとなった。なお、今回はかつてなかった試みとして、外部からゲストをお一人お呼びして、基調講演を行ってもらった。合同研究会を今後開催するに

当たっての一つの方向を示すと同時に、40回目という節目に相応しいものになったのではないかと思っている。今回の合同研究会を企画するに当たってご尽力された皆さん、特に経済学部の先生方には感謝申し上げます。そしてこれまた初めての試みであるが、40回を記念して当日のゲスト・三宅卓志氏（名古屋市工業研究所電子情報部長）の講演内容と3名の報告者の報告要旨を本紀要に掲載することとした。

試行錯誤を繰り返しながらも、教員合同研究会が大学の発展とともに更に回を重ね、いっそう充実した研究会になることを衷心より祈念するものである。